

# バレーボールにおける攻撃の一考察

(その2)

西 村 栄 蔵

## 目 次

### I は じ め に

#### II これまでの攻撃について

#### III これからの攻撃について

##### 1. バレーボールの攻撃の戦術体系の志向

### IV ま と め

## I は じ め に

バレーボールは本来、レクリエーションスポーツとしてスタートし、その後、ルールの改正が再三行われ、今回もルールの改正で技術、戦術が大きく変化することと、多くの改善工夫がくわえられる。

そこで小論は、現在のバレーボールの実態に視点を置き、バレーボール独自の戦術体系化を方法的に考えるものである。

## II これまでの攻撃について

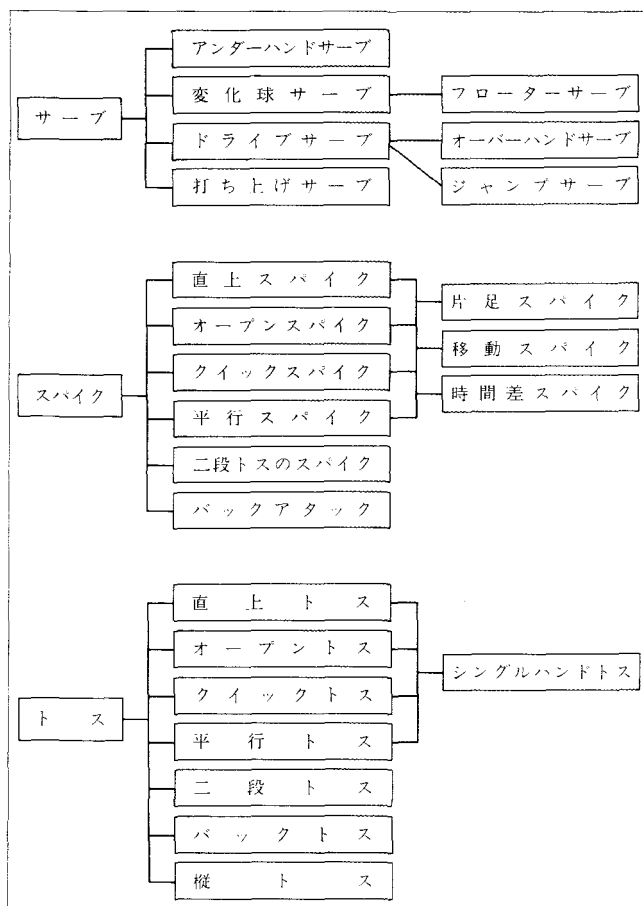
これまでのバレーボールの技術・戦術で大きく変化した部分だけを図①、②、③に分類してみたい。

図①は、バレーボールの基礎技術のサーブ、スパイク、トスである。

サーブでは、現在、ジャンプサーブが流行している。

スパイクについては、技術・戦術から考えて移動攻撃で片足スパイク等が戦法として現われた。

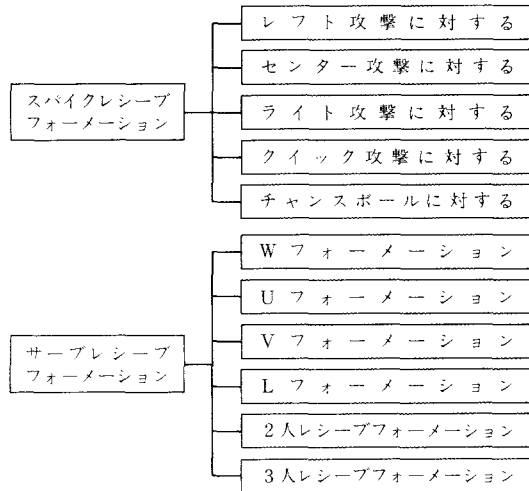
トスでは、ルールの改正でハンドリングがあまくなり、シングルハンドトスが多用されるようになった。



図① バレーボールの基礎技術(サーブ, スパイク, トス)

図②は, バレーボールの応用技術のスパイクレシーブフォーメーション, サーブレシーブフォーメーションである。

スパイクレシーブフォーメーションではオーソドックスのチームが少なくなり速攻型のチームが多くなり, クイック攻撃に対するレシーブのフォーメーションを付け加え, サーブレシーブフォーメーションでは, 近年,



図② バレーボールの応用技術（スパイクレシーブフォーメーション，サーブレシーブフォーメーション）

選手が大型になり従来のように、WフォーメーションやUフォーメーションでなく、2人のサーブレシーブフォーメーションや3人のサーブレシーブフォーメーションを多用することが多くなってきたことを示している。

また、サーブブロックが攻撃の1つであったが禁止になり、サーブも研究の余地がおおいにある。

以上のように、これまでのバレーボールとこれからのバレーボールは、そう違いはないが、現状のバレーボール界は、それぞれの指導者の経験上に、成り立っているといえよう。

だが、これからは研究の余地がおおいにあり、本質的な特性に基づいた、技術、戦術が必要になってくるであろう。

### Ⅲ これからの攻撃について

これからのバレーボールは、基礎技術、応用技術を整理し、その技術を系統的に追求することが必要になり、各戦術を分析し、戦術体系を構築し、

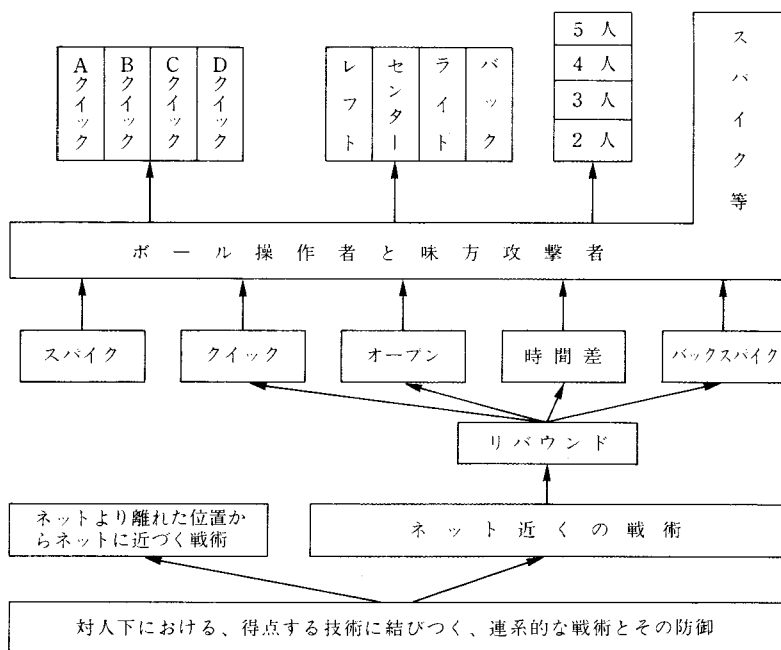
それに基づいて練習法を考えてゲームで活用することが必要であろう。

## 1. バレーボールの攻撃の戦術体系の志向

### (1) ネット近くの各種の攻撃法

ネット近くの各種の攻撃法には、クイック法、オープン法、時間差法、バックスパイク法、リバウンド法等がみられる。とくにバックスパイクには低いトス、高いトスがあり、これらは味方のパスを受け、トスとこれにかかわる味方の攻撃者による連系プレーで、それぞれの攻撃法が並列的にとらえられ、得点されている。

また、リバウンド法は、ルール改正でレシーブのドリブルが柔らかくなり、リバウンド後のレシーブによって多彩な攻撃が生まれることから、とくにこのことは、攻撃の戦術を系統的に練習し、各種の攻撃法を身につけるために、必要なことになろう。



図③ バレーボールの攻撃の戦術体系

## （2）各種攻撃法の体系化の視点

クイック法、オープン法、時間差法、バックスパイク法、リバウンド法の各攻撃法は、一定の視点に基づいて、体系化が可能になる。

次にあげるのは、攻撃の体系化にあたり、視点としてとらえられよう。

- ① 距離
- ② 時間
- ③ スピード
- ④ ボールの高さ
- ⑤ ボールの方向
- ⑥ 攻撃者の動き
- ⑦ 攻撃者の人数
- ⑧ セッターの位置

バレーボールの攻撃の戦術体系化を試みると図③のようになる。

## IV まとめ

ルール改正にあたって連系的な戦術とその防御としてとらえた。

そしてバレーボールの戦術体系については、バレーボールの本質的な特性を基盤にし、従来通りの攻撃から移動攻撃、片足スパイク等をくわえ、トスにおいても、シングルハンドトスをくわえ、また、攻撃においてリバウンド戦法も付け加え位置づけた。

ルール改正後、ハンドリングがあまくなりこれからのバレーボールは、技術、戦術でこれまでのバレーボールより少し違った味ができるようにおもわれる。

このように本研究は、これまでの攻撃の戦術のとらえ方と異なり、バレーボールの戦術の高度化を志向し、これからの攻撃の各技術の研究や、それらを把握し指導に寄与できると思われる。

しかし、これらも一考の余地があるので、今後、さらに研究し、より一層攻撃の戦術体系を、志向したいと考えている。